

あさかぜ

高知学芸高等学校同窓会関東支部

機関誌 38号

2025.9

〒170-0003

東京都豊島区駒込

4-2-34 中城千秋

TEL. 03-5974-2074

第38回関東支部総会は 10月25日(土)にレストランアラスカで 下一桁5の期が幹事となって開催します！

- 第37回（2024年）関東支部総会レポート
- 特別授業「アートで心を探す」丸本真代氏(24期)、特別講演 鬼谷慶子氏(54期)
- 第37回（2024年）関東支部同窓会写真特集
- SPECIALインタビュー「林嗣夫先生(国語)に聞く 戦後80年卒業生に伝えたいこと」
- 各期の声
- 17期生 卒業50周年のお知らせ
- 会計報告、常任幹事・学年幹事の募集、同窓会運営の強化に向けたご協力をお願い
- 高知学芸高校同窓会 第38回関東支部総会のご案内
- 第38回 関東支部総会 特別授業の講師紹介

卒業後41年を迎えて

25期 山本晴敏



関東高知県人会大懇親会で勧誘され今年度より25期の幹事として関東支部に参加しています。10月25日の関東支部総会に向け25期生に声掛けを開始したところ、快く特別講義の講師を引き受けていただいた野中恵子さん、同期生間で顔の広い西森章君や野瀬明君の心強い協力を得ております。また、担任であった瀧石誠司先生も関東支部総会にご参加いただく予定です。

私は、大学卒業後、都市銀行（その後統合してメガバンク）に30年間勤務し、現在は独立系リース会社に勤務しています。勤務先では法務業務を中心に従事してきましたが、会社勤務と並行して勉強していた司法試験に運良く合格し、司法修習を経て2022年4月より社内弁護士として勤務しています。

学芸の思い出といえばソフトボールです。中学校では、坂本和幸先生

が顧問のソフトボール部に所属して練習に励み、また、高校では年2回のクラスマッチは楽しみでした。ソフトボールとの縁は今も続き、自宅のある横浜市都筑区のソフトボールチームに約20年前から参加し（写真）、チームの仲間と週末の練習や試合、プロ野球観戦（ハマスタ）、カラオケ等を楽しんでいます。

関東では、職場等で高知県出身者に会うことはなく、高知の話をする相手がおらず、また元々歴史好きでもあり、高知に関係する人物や史跡等があれば調べたりしています。横浜市では、明治維新直後のマリア・ルス号（Maria Lus）事件で、神奈川県の大江卓が、奴隸としてペルーに向かっていた清国人の身柄を解放する判決を出していますが、私は誇りに思っています。

関東在住の25期の皆さん、今回は、25期生が還暦を迎える節目であり、かつ、瀧石先生のご参加、野中さんの特別講義など、ご参加いただきたくタイミングとしてはベストだと思っています。二次会も予定しており、学芸時代の話や高知の話等で盛り上がりませんか。関東支部総会へのご参加をお待ちしております。

第37回（2024年） 関東支部総会 開催

昨年10月、東京都千代田区の学士会館にて、第37回高知学芸高校同窓会関東支部総会が開催されました。学士会館は2025年から改築工事に入るため、この会場での最後の開催となりました。今回は、下一桁4の期が担当しました。

同窓会本部からは西川博行会長（6期）と福田恵美副会長（6期）、学校からは橋本和紀校長、松本直人事務長、森下表先生（社会・同窓会副会長）が来賓として出席。さらに、パリパラリンピック銀メダリストの鬼谷慶子さん（54期）も参加し、1期生から54期生まで計72名が集まりました。

中城支部長（18期）からは、昨年の支部長就任後、初めての総会に臨むにあたり、この1年の取組みが報



中城支部長



同窓会本部 西川会長

告されました。まず、幹事を複数期で担当する新しい仕組みを導入し、縦のつながりを強めることで若い世代の参加を促す工夫をしたこと、また、参加申し込みや会費の支払いをネットで行えるようにし、郵便費用の削減や利便性の向上を図ったことが紹介されました。さらに、支部会則の改定や機関誌「あさかぜ」のWeb掲載、定例幹事会の開催など、運営の基盤を整えてきたことも強調されました。最後に、会員一人ひとりの力を結集して支部をさらに活性化していきたいとの思いが語られました。

西川同窓会本部会長からは、コロナ明けで再び対面総会を開催できた喜びが語られました。昨年は朝ドラ「らんまん」効果で高知の観光客数が過去最高を記録し、来年の朝ドラでやなせたかしのアンパンマンが題材になるとの朗報も紹介されました。また、同窓生の活躍として、シ

ンガポールで新型コロナ対策に貢献し国から表彰を受けた井上雅文さん（8期）、そして学芸高校初のパリリンピック日本代表選手となり銀メダルを獲得した鬼谷恵子さん（54期）の功績を讃えられました。母校創立67周年を迎えるにあたり、同窓会として力を合わせ母校の発展に貢献していこうと呼びかけました。

橋本校長先生からは、学校の現況と卒業生・在校生の活躍が紹介されました。9月から10月にかけて、卒業生が高知新聞一面に3度登場しました。まず54期の鬼谷恵子さんがパリリンピックで銀メダルを獲得し、在校生寄せ書きの日の丸を手で表彰式に臨む姿が放映され、大きな感動を呼びました。続いて53期の三宅香帆さんが文芸評論家として著書がベストセラーに。さらに3期の亀井昭子さんは、フランスでエルメスなど世界的ブランドの香水を手がけた唯一の日本人調香師として紹介されま



橋本校長先生

した。在校生も健闘しており、高3の久米さんが国際研究発表で特別賞を受賞、高3の三木くんが日本生物学オリンピックで銀メダルを獲得。また高1の澤近くんがバスケットボールU18日本代表に選ばれ、日中韓交流試合で活躍しました。加えて、昨年関東同窓会で講演した坂東真由子さんが、本校柔道場を拠点に子ども柔道教室を開設予定で、地域貢献につながる取り組みも始まっています。最後に、学校では食堂券売機購入を目的にクラウドファンディングを実施中で、ぜひ卒業生の協力をお願いしたいとの呼びかけがありました。卒業生と在校生の輝かしい活躍が互いを励まし合い、学芸の絆を一層深めています。

総会では活動報告と会計監査報告に続き、恒例の特別授業を実施。「アートで心をさがす」と題し、造形作家・臨床美術士の丸本真代さん（24期）が作品を通じて心を読み取る講演を行い、続いて鬼谷さんによるメダル獲得までの軌跡を語る講演が行われ、参加者一同が深い感銘を受けました。最後に全員で「さよならは言わない」を斉唱し、第1部が締めくくられました。

（36期 藤原清幸 記）

特別授業

アートで心を探す

Studio Art Lab. 主宰

丸本真代氏 (24期)



本特別授業は、24期の丸本さんを講師にお迎えし、「アートで心を探す」というテーマで行われました。講師ご自身の臨床美術（アートセラピー）の実践を軸に、子どもから高齢者まで《心が動く》瞬間をどうつくるかについて、具体例を交えながらお話しいただきました。

【なぜ「心」を探すのか】

「今日も皆さんの活躍をたくさん聞きましたが、それでも、どうして《心》を探すのでしょうか？」と、丸本さんは《忘》《忙》《無心》といった漢字を手がかりに切り出します。忙の《りっしんべん》は心を表し、忙しさの中で心を《亡》くしがちな私たち。反対に、子どもには《無心》《無邪気》という力があり、世代を

<丸本 真代氏 経歴>

- ・造形作家、M's palette 代表
- 2級臨床美術士・芸術造形研究所講師
- 元女子美術短期大学・亀田医療大学講師
- 臨床美術学会・美術教育学会に所属
- ・臨床美術士としてのこれまで
- 凸版印刷社内でのリフレッシュ講座
- 埼玉県生きがい大学講師
- リハビリテーション病院での臨床美術
- 高齢者施設でのリハビリレク
- 公立小学校での総合学習指導
- ・学会発表・講演会など
- 臨床美術によって自己肯定感を高める
- 臨床美術というコミュニケーションによって居場所を作る
- 総合的学習における美術教育の可能性
- 幼稚園課外活動としての臨床美術
- 現場を繋ぐ臨床美術士の役割

1995年に考案され、東北福祉大学の感性福祉研究所でエビデンス研究が始まり、大学や病院の現場での活用が広がってきました。

語り、外界からの働きかけが心の状態を左右することを示しました。丸本さんが、高校生に6回のアート講座を実施し、前後で自己肯定感を測定した実験では、平均で約8ポイント向上、78%の生徒にポジティブな変化が見られました。

【アート鑑賞のハードルを下げる】

丸本さんは、田中一村の作品からヒルマ・アフ・クリントの抽象絵画までを取り上げ、「情報(作家の背景)」という《ものさし》があると絵は見やすくなるが、同時にカテゴリーに縛られやすくなる」と指摘します。学校教育ではカテゴリー学習に慣れる一方で、分類できない表現に不安

問わず、「心」を探索する必要があるのだと語ります。一方で、丸本さんが、最近とくに気になっているのは《無感心》、すなわち心が動かない子どもたちの存在です。丸本さんは、現在、大学や病院での活動をいったん離れ、子どもへの臨床美術・アートワークに専念していると説明しました。

【臨床美術（アートセラピー）とは】

臨床美術は、絵やオブジェの制作を楽しみながら脳を活性化し、認知症の予防・症状改善、介護予防、働く人のストレス緩和、そして子どもの感性教育に効果があるとされる、《芸術療法》です。この臨床美術は、

【心はどこにある?】

「心は胸でしょうか、頭でしょうか」。脳科学では心の働きを脳の機能として説明しますが、同時に《心はからだと環境にまたがって発生する》とも言われます。丸本さんは、聴衆の表情やうなずきに自分の心が影響を受ける実感を



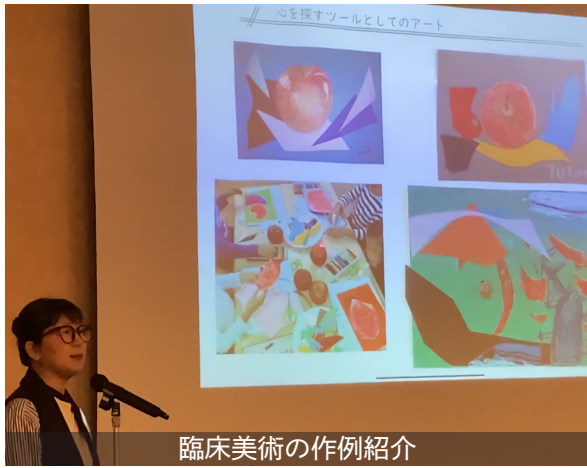
特別授業の様様

を覚えがち。だからこそ《自由に見ていい》感覚を取り戻す補助線が必要だと語りました。

AI時代に価値を生む《アート思考》が注目されましたが、子どもはそもそも《未知を受容する表現者》。丸本さんは、ピカソの「子供は誰でも芸術家だ。問題は大人になっても芸術家でいられるかどうかだ」という言葉を引きつつ、子どもがカテゴリーに回収されない感覚を持ち、自分を疑わずに描くことの力を具体例で紹介しました。

【学校の美術教育のむずかしさと、臨床美術の姿勢】

「自由にやってごらん」、と言いな



臨床美術の作例紹介

がら最後に教師のものさしで評価される。そのギャップが、苦手意識や美術離れを生む。丸本さんは、かつての自分も含めて反省を込めつつ語ります。そして、以下のような臨床美術の特長を説明しました。

- ・だれもが表現者であることを尊重する。
- ・目の前で起きる変化（絵の具の動き、色の変化）に集中する時間を大切にします。
- ・作品を《良くする》道を指示ではなく探索で伴走する。

そして鑑賞会は《Why》で詰めるのではなく《I発信》で良いところを見つけ合う場に。これにより自己肯定感や多様性の受容、他者理解が育ち、結果的に自己認識が深まります。

【五感で描く】

リンゴを描く時は《よく見る》だけでなく、嗅ぐ・触る・味わう―五感を総動員する。夏の海の制作では外に出て温度を感じ、音楽からコンポジション作品を作る取り組みも、丸本さんから紹介されました。認知症の方の作品も、幼児の作品も、そ



「心を探す」ワークの様

れぞれに唯一の魅力があることを、実例の写真とともに示しました。

【みんなで《心を探す》ワーク】

丸本さんのガイドのもと、会場では輪ゴムのアウトラインから始める鉛筆ドローイングを実施しました。

重なりの一部を黒く塗り、視点を反転し、点・線・面の模様で画面を満たしていきます。最後はサインを入れて完成。隣同士で作品を見せ合い、《繊細な線ですね》などポジティブな言い換えでコメントを贈り合う鑑賞会を行いました。初対面でも場がほどこけ、互いの《新しい面》を発見できる時間になりました。

このように、参加者同士で作品を

見せ合い、相手の良い点を伝え合うと、新たな発見や距離の近さが生まれると丸本さんは語りました。職場でもアイスブレイクとして活用でき、上司や部下の意外な一面に気づくこともあるそうです。

「どうですか、心は見つかりましたか。もしなくしたと思ったら、私を呼んでください。アートと一緒に探しましょう」。丸本さんの言葉に、会場全体が温かい拍手で応えました。

アートは《心を動かす》ためのツール。次に忙の字を見たら、ふと立ち止まり、紙と鉛筆を手に取りたくなる、そんな余韻が残りました。

(36期 藤原清幸 記)



ありがとうございました

特別講演

パリパラリンピック円盤投げ銀メダリスト

鬼谷 慶子氏 (54期)



「改めまして、54期生の鬼谷慶子と申します。今年のパリ・パラリンピックで、陸上女子円盤投げに出場し、銀メダルを獲得することができました」。にこやかに語り始めた鬼谷さん。神戸での世界選手権で出場が決まり、9年ぶりに芸芸高校を訪れたときのこととも印象的だったと振り返ります。「校舎の赤レンガや藤棚は変わらず、安心感がありました。でも、在校生がとても活気に溢れていて、積極的に質問してくれたのがすごく印象的でした。私の方がエネルギーをもらいました」と笑顔で語りました。

表彰式で掲げた日の丸には、生徒や先生方の応援メッセージがびっしり。「この国旗を掲げられたのは本当に光栄でした」と目を細めます。

【夫は《競技アシスタント》として】

鬼谷さんは、円盤投げの舞台裏についても語ってくれました。

「私の競技は《座位投擲》^{てき}といって、40kg近い投擲台に座って投げます。台の運搬や試合前の器具修正、車いすからの乗り移り：全部、夫が《競技アシスタント》として支えてくれています。もしアシスタントがいなかったら、そもそも競技ができないんです。」

ただし、マラソンのガイドランナーのように日本選手団から派遣される制度はなく、多くの場合は個人で準備しなければならぬのが現状で、「芸芸のみなさんからのご支援が、本当に心強かったです」と感謝を伝えました。



表彰式で掲げた日の丸

【競技をはじめてからの歩み】

鬼谷さんから、パリパラリンピックで銀メダルを獲得するまでの軌跡を紹介するビデオを披露していただきました。



銀メダルを披露・夫の健太さん（後方）

鬼谷さんの競技人生は決して平坦ではありません。難病による入院を経て、アーチェリー、やり投げ、こん棒投げと種目を模索しながら続けてきました。ときには肩を痛めて断念することもありましたが、試行錯誤の末に円盤投げにたどり着きました。

最初は洗濯機のかき上げ台を使った手作り投擲台からのスタートでしたが、そこから支援を受けて練習環境が整い、記録も伸びていきました。そして2023年のアジア大会で

銅メダル、2024年神戸世界パラで銀メダル、さらにパリパラリンピックでアジア新記録の銀メダルを獲得するまでに至りました。

【未来への思い】

「私より前に座位投擲をやっていた人が少なく、競技環境もまだ整っていません。だからこそ、これから挑戦したい選手のために環境をつくっていききたい。そんな思いも込めて競技を続けています。」

最後に銀メダルを手に、「もしよかったら、このあとぜひ触りにきてください!」と会場に呼びかけ、あたたかい拍手に包まれました。

(36期 藤原清幸 記)



ありがとうございました

第37回 (2024年)

関東支部同窓会
写真特集

市川浩幸関東支部副支部長の乾杯で懇親会に入りました。16期生への卒業50周年記念品の贈呈、松田恵子(1期)さんによるフラダンスからスタート。次に、今年は運営期の1つの24期生によるたくさんの楽しい企画が行われました。最初は、テーブル毎の対抗戦のクイズ合戦が行われ、競技は片足立ち選手権・アルコール度数測定戦・校長先生の今日のネクタイの色当て・歴代校長先生のお名前を書く、という内容で優勝を争いました。さらに24期生によるカラーコーディネイトイベントでパーソナルカラー診断。最後の企画は24期生の指導による全員によるよさこい踊りなど色々な企画で、あっという間に時間は過ぎていきました。最後は学芸讃歌を全員輪になって合唱し盛況のうちに終了しました。

今回の関東支部総会・同窓会は2025年10月25日(土)に下1桁5の期が幹事となって開催しますので、奮ってご参加ください。



市川副支部長の乾杯



卒業50周年の16期の皆さん



松田さん(1期)のフラダンス



テーブル毎のクイズ合戦①



パーソナルカラー診断



テーブル毎のクイズ合戦②



参加者全員でよさこい①



参加者全員でよさこい②



橋本校長先生と



54期 鬼谷さんと



24期の皆さんと



「学芸讃歌」大合唱



参加者全員で記念撮影

SPECIAL
インタビュー

林嗣夫先生（国語）に聞く

戦後80年

卒業生に伝えたいこと

今回のスペシャルインタビューは、学芸中学教員だった国語の林嗣夫先生。89歳になった現在も高知市内で元気に暮らしています。

今年は戦後80年の節目の年。林先生が戦争について、見てきたこと、聞いてきたことを語ってもらいました。また卒業生に伝えたいことも聞いてきました。

インタビューは6月に、高知市内の林先生のご自宅で実施。インタビューアーは、29期幹事の西が務めました。

< 林嗣夫先生 略歴 >

- ・1936(昭和11)年2月生まれ。
1945(昭和20)年の終戦時は9歳。
- ・高知工業高校を卒業後、民間会社
に就職するも、退社し、高知大学へ
入学し卒業。
- ・1961(昭和36)年、25歳より
学芸中学の教員。
- ・2006年(平成18)年に、手書き
プリント「中学生の哲学講座」を
作成。
- ・2012(平成24)年退職。

80年前の出来事

1. 高知の林先生の自宅で

◆先生に「授業中に先生が話した昭和20年の出来事をもう一度聞きたい」と、手紙を出したら1週間返事が来て、感激でした。

私も、本当にあなたが高知に来るとは思いませんでした。ただ、卒業生が自宅に訪ねてくることは、よくありますし、歓迎します。今回のように自転車で来る例は、あまりありませんがね。

◆先生が授業中に語った終戦前後の話は、私にとって衝撃的で今でも覚えていてます。今日はそうした話を改めて聞きたいと思います。

2. 四万十町（十和村）の生まれ

◆先生は十和村、今の四万十町の生まれですね。

昭和11年生まれです。当時の村は貧しかったと思います。田畑が少ない、山村ですから。

父は、戦争が始まると、朝鮮半島で兵隊を集める兵役事務の仕事をするため、母と一緒に高知を離れました。私は十和村に祖父母と残りしました。ただ、祖母が病気になる、戦争が終わる少し前に、両親は高知に戻ってきていました。

3. 満州に多く渡った高知の人達

◆先生は十和村から中国東北部の旧満州に渡った人たちが、昭和20年に体験した悲劇を授業の中で教えてくれました。当時、満州では、日本か

ら満蒙開拓団という人たちが家族ごと入植をして、開墾しながら農業を始めていました。

満州に渡った人は、人口比で見ると、長野、山形に次いで高知が多く、当時の高知県人口の100人に1人以上が渡った計算になります。

私の育った十和村はその当時、十川村と昭和村に分かれていました。

十川村の記録だと、昭和15年の人口は3400人。昭和18年から20年までに村から547人が満州に渡っています。田畑が少なく貧しかったこともあり、多くの人が満蒙開拓団に参加したわけです。

4. いとこが満州へ

◆親戚等で満州に行った人たちはいますか。

私と同年のいとこが、お父さん・お母さんと一緒に満州に行っています。戦後、いとこや戻って来た人たちから聞いたことが、当時10歳だった私にとって本当に「たまるか」でした。

5. 昭和20年、満州が戦場に

◆昭和20年8月に日本とソ連が戦争状態になり、満州が戦場になります。村史によるとその時、十川村か



インタビューする西さん(29期)

ら渡った547人は、右往左往しながら早いうちに、ソ連軍の抑留下に置かれています。

547人は急に始まった戦争に困惑しながらも、避難の準備をしました。夏ですから、着るものは少し、食糧も持てるだけ。その年の冬も満州にいることになるとは、想像できず、服が少なかったわけです。

6. 転々とする抑留生活

◆547人の体験談を私が中学生の時に語ってくれたんですね。

昭和58年に十川村の悲劇が高知新聞に連載されました。そうしたこともある、あなたが中学生の時に授業中に悲劇の話をしたということですよ。

◆村史や高知新聞によれば、抑留生活ではよく収容所を転々としています。移動は屋根のない貨車(汽車)か、徒歩と。

移動が547人の体力を奪っていきます。持ってきた食糧はなくなり、支給の食糧は少なく、医薬品もない。そして冬になる。

7. 赤ちゃんを「潰す」

◆先生は授業中に「大人たちが赤ちゃんの首を回して殺した」話をし

ていました。「潰す」という表現をして。

戦後、重苦しい話を聞いた中でも、この話は衝撃的でした。移動の途中や収容所で、体力の弱ったお母さん、お乳は出ません。

やせ細ったわが子、赤ちゃんはもう長くありません。お母さんは「自分じゃ殺せないから」と人に頼んで首を回して殺してもらっていたと。戻って来た人たちから昭和21年に聞きました。

8. 遺棄された子供たち

高知新聞の連載では、十川村の開拓団の人は「収容所から徒歩での移



インタビューを受ける林先生

動中に、親に遺棄された裸同然の子供が、這って歩くのを見た。でも助ける余力がなかった」と語っています。この子供は日本には戻れなかったでしょう。

◆育てられなくなった赤ちゃんを「川に流した」「コーリャン畑に置いてきた」という話は、ほかの地域の開拓団でもあります。地元の人に託したとか、売った話も。残留孤児という人たちが、この時に発生したわけですね。

9. 547人のうち

帰国者は181人

◆満州での抑留生活は長く、十川村に戻って来たのは、翌年の昭和21年の9月ですね。

途中で冬を越しています。十分でない食糧。食糧を現地で買おうにもお金がない。服は夏服。冬の満州は零下20度を下回ります。窓ガラスもない、暖房もない施設で抑留が続けば、体力がどんどん落ちます。赤痢や腸チフスも蔓延して、多くの人が命を落としました。

◆戻ってこれなかった人が多いわけですね。

村史では、547人中、361

人が途中で亡くなったとあります。戻ってくるのができたのは、たった181人と。村史は、10ページに渡って、亡くなった人たちの名前を記載しています。

10. 一人で帰って来た、いとこ

◆先生のいとこは十川村に戻ったことができたんですね。

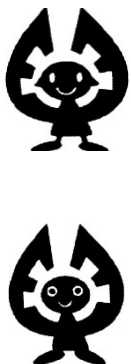
戻ってきました。家族3人の中で戻ってくるのができたのは、いとこだけ。両親は冬に赤痢か腸チフスで亡くなったそうです。

その時、地面は凍結。大した道具もない中、少し土をかぶせて埋葬しても、翌朝には野犬が荒らしていたそうです。

11. 80年経って思うこと

◆戦後、80年が経ちました。

戦争を経験した本人から話を聞くことは、間もなくできなくなります。これからはもっと教育の中で、伝えていく必要があると考えています。



卒業生に伝えたいこと

1. 教師を始めたのは昭和36年

◆学芸で教師を始めたのは1961（昭和36）年ですね。先生は、早い時期から、当時珍しい乗用車で学校に来ていたと聞きました。

はじめはバイクでしたが日産のダットサンという車を買って通勤していました。教員で当時、自動車の免許を持っていたのは私以外だと社会・狩野義夫先生、理科・矢野清八郎先生、理科・馬島一先生位でした。

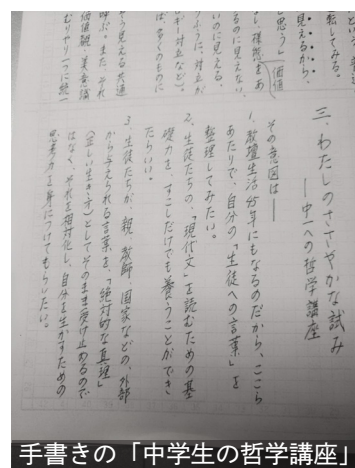
◆当時の学校はどんな様子でしたか。

学校とは、教育とはどうあるべきか、クラスマッチはどうやるべきかとか、よく議論をしていました。生徒とも。今では考えられないですが、ホームルームの時間に、各教室から合唱が聞こえていました。

2. 充実した教員生活

◆教え子だった生徒、卒業生に伝えたいことがありますか。

まず、私が学芸で送った教員生活は充実していたということです。それを先に、卒業生の皆さんに伝えておきたい。



手書きの「中学生の哲学講座」

3. 手書きプリントで、送る言葉

◆先生は、詩集等を発刊されていたすよね。教員生活が充実していた以外に、卒業生に伝えたいことがありますか。

これは私が時間講師になつてからつくった、中学生に教える際の教材です。俗に言う「手書きプリント」。

◆確かに手書きです。

表題は「中学生の哲学講座」です。哲学は世界の「真理」をつかむための思考方法ではなく、誰もが納得できる「普遍的」な世界理解を作り出す方法であるはずです。

4. 思考力を身につけよう

卒業生に伝えてたいのは、プリントの最後にある「生徒たちが、親教師、国家などの、言葉を『絶対的な真理』（正しい生き方）として、受け止めるのではなく、それを相対

化し、自分を生かすための思考力を身につけてもらいたい」ということです。

5. 具体例「サントアはいますか」

◆何か、具体例で先生の伝えたいことを教えてください。

中1で入学したばかりの生徒に、私が出す試験問題で「サントクロースはいるでしょうか」というものがあります。

◆どうすれば、点数がもらえますか。

何か書いていけば、加点ですよ（笑）。空白だと点数はあげられないですが。

「サントクロースはいるのでしょうか」は有名な話ですから検索すればすぐ出てきます。

昔、子供からこうした質問を受けたアメリカの新聞社は、そりに乗って来るサントクロースだけでなく、「愛、思いやり、まごころ」の象徴つまり記号としてのサントクロースがいる、と社説で回答しています。

子供たちにとって「いる」と感じて幸せになれるなら、それで良い。「いない」と思うならそれで良い。答えを統一する必要はありません。

6. 混迷の時代こそ思考力が必要
◆学芸の中一の生徒に問題を出す、どうなりますか。

多くは「いません」と書きますね。それは科学の思考方法です。ただ中には「います」と回答し、「お母さんや保育園の先生がサントクロース」と答える生徒さんも。愛、思いやり、まごころの象徴のように思っているわけです。

卒業生の皆さんには、混迷の時代、普遍的なキーワードがない中、物事の絶対性等を一度自分で相対化すること。その上で、自分で思考する力を養ってほしいものです。



ありがとうございました

各期の声

今、私たち同窓会に

できること

10期 瀬戸口要子および有志

(村岡道明、公文富士夫、森口博基、他1名)

関東支部同窓会は今年第38回目を迎える。昭和63(1988)年3月24日の上海列車事故をきっかけに関東在住の卒業生有志が母校のために役立ちたいとの思いから立ち上げ、その年の11月19日に第1回支部総会を開催し、今日につながる。

さて今年6月13日(金)、10期B組の同窓会が高知市内で開かれた。各自の近況報告の後、移動した2次会で母校の現在の大学入試実績の低迷について有志で議論した。特に難関大学への合格実績において土佐高校に大きく差を付けられている事実(実績データ)を確認し、卒業生としてその実績向上に向け母校に何らかの提案、協力ができないものだろうかと話し合った。

橋本校長からの情報では有名大学への合格者数は土佐には差を付けられているが3、4番手の高校(追手前、土佐塾)には負けていないとの

ことであった。

同窓会として母校に協力できることは何かないかと考え、

1. 大学入試合格実績の向上 進路選択においては偏差値や大学内容だけではなく、将来への展望を見据えた大学選択を促す。学生は高い志を持ち、それに向けてモチベーションを高揚させて勉学に励み、適切な大学に進学するのが理想である。ここに多くの分野で活躍する先輩卒業生の経験や活躍分野の内容を直接知ることにより大学選択に活用する。

2. 学校経営 少子化の中で私学経営は今後ますます厳しさを増していく。クラウドファンディングは緊急時や記念行事などの特別なときには有用であるが、施設の拡充維持管理には他校と同様に卒業生からの寄付を活用する。

といったことを有志で話し合った。

10期生は昭和25(1950)年生まれ。東大安田講堂事件を受けての東京大学・東京教育大学(現筑波大学)の入試が中止になった年の受験生である。学芸の名物進学指導のS先生の朝礼での大声の叱咤激励はいつもの風景であった。が、昭和44(1969)年の年明けの朝礼でS先生は「今年の3年生は昨秋以

来ずっと燃えている。燃えつぱなしである。県内の他の高校には負けないう、ぶつちぎりである」と励ましてくれた。それから間もなくして東京大学・東京教育大学の入試中止が正式決定されニュースで流れた。全国の受験生は大混乱である。旧帝大では前年の最高合格点がこの年の最低合格点であったという。

そして4年後、石油ショックの大混乱の中、社会にデビュー。社会の様々を経験して、今年、後期高齢者の仲間入りをする。ライフステージの最終段階に入り、「今、母校のために何ができるか」と考えている。



10期B組同窓会の集合写真

「竹ちゃん」と呼ばれて、

あの頃へ

31期 千葉由希子 (旧姓竹下)

2016年の関東支部同窓会で、私たち31期が幹事を務めることになったのが良いきっかけとなり、うん十年ぶりに同級生と再会しました。最初は少しだけ緊張しましたが、「竹ちゃん」という呼び名がとても心地よく、一瞬で学生時代に引き戻されたような感覚になったのを、今でも鮮明に覚えています。言葉の力、そして同級生との絆の温かさに、胸がいっぱいになりました。

それ以来、同級生との交流の輪が広がり、さまざまな機会でも再会できることをとても嬉しく思っています。卒業してからの長い年月、まったく会わなかった仲間たちとも、顔を合わせると不思議とすぐにあの頃の空気に戻れる感覚があります。見た目はそれなりに変わりましたが(笑)、心の距離はむしろ近くなっているような気がします。

私はひとりっ子でしたが、学芸での6年間の寮生活を通して、自立心や協調性を自然と身につけることができました。ときには楽しいだけではなく日々もありましたが、そのす

べてが今の私の土台となっています。あの時間があつたからこそ、社会に出たあとも前向きに歩んでくれたのだと思います。

新卒で入社したウェディングの会社、気がつけば勤続31年。まさに天職と思える仕事に出会えたことに感謝しています。定年まであと10年ほど。これまで培ってきた経験を活かし、企業人として社会に貢献していきたいという思いを強くしています。

私生活では、ひとり息子が昨春中學生になり、子育ての第一段階がひと区切りついたように感じています。現在は、息子のバスケ部の保護者役員や学校の広報部の活動にも参加し、新たなコミュニティの中で刺激をもらいながら、自分自身の世界も広げているところです。

50代になった今でも、「ポジティブの神様」と呼ばれるほど前向きな性格は健在です。学生時代にはできなかった《お酒を飲みながら語る時間》が、今では同級生との再会のたびに楽しみとなっています。

このご縁を大切に、これからも笑顔でつながっていけたらと思います。

近況報告

35期 金子努



息子さんと

皆様、こんにちは。35期の金子努と申します。同期同クラスの藤原裕久君から依頼をされましたので、近況報告をさせていただきます。

10年前にBOXX学芸に投稿させていただきましたが、それから時が経ちましたので、改めて自己紹介をさせていただきます。

私は、学芸高校卒業後、学芸進学アカデミー経由で京都大学法学部に進みました。司法試験を志しましたがが学生時代には合格することができず、高知県庁に入庁しました。その後、幸いにも司法試験に合格するこ

とができ、高知県庁を退職し、司法修習を経て、弁護士になりました。

平成21年に高知市内で弁護士事務所を開業し、現在に至ります。弁護士業務全般を取り扱っていますが、交通事故、相続、離婚、企業側や行政側の事案が多い印象です。依頼者の日常の暮らしや業務を守ることをモットーに、相談される方の話をよく聞いて一緒に解決策を考えるスタンスを心掛けています。

今年度は高知弁護士会の会長を務めています。毎月東京の日本弁護士連合会の理事会に出席しなければならぬなど、多種多様な会務に追われており、大変多忙ですが、責務を果たすべく頑張っています。

弁護士会では人権擁護大会（人権大会といえます）や民事介入暴力対策委員会（民暴大会といえます）等の大会が毎年全国各地で開催されており、できるだけ参加するようにしています。新たな知見を得られることはもとより、その土地の歴史や風土、人を知ることができ、大変有意義です。今年は5月に函館に行きました。9月には秋田に、12月には長崎に行く予定です。

趣味でゴルフをしています。休日にゴルフ仲間と一緒にプレイをする

のが何よりの息抜きです。人権大会や民暴大会でも記念ゴルフ大会が開かれることが多いので、全国各地のゴルフ場をラウンドすることも楽しみです。今年は多忙を極めていますが、健康維持、ストレス解消のためにも、できる限りプレイしたいと思っています。

今年で50歳になります。自分が50歳になるなど、若いころには思いもしませんでした。これからどんな未来が待ち受けているかわかりませんが、よりよい人生となるよう、年を重ねていければと思います。

そろそろ同窓会にも顔を出させていただくかとも思っています。どこかでお会いした際にはどうぞよろしく願いいたします。



弁護士会館前にて



2025年8月、

本部同窓会・懇親会に

参加して

31期 西田順也

2016年10月22日、今から9年前の関東支部同窓会は私を含めた31期が幹事の年でした。31期は学芸高校同窓会にとって上海列車事故を経験した特別な期です。30期の先輩から私に「来年は幹事だよ」とお誘いを受けた時、私は「事故のことに触れないわけにはいかないのではなか」、「和解していない遺族もいる、高校の同窓会であり校長もみえる場で、どの立場で何を言えるのか」ということが気掛かりでした。結果的には事故のことをことさら取り上げることはなく、例年通りの同窓会・懇親会を企画したことを思い出します。しかし、その時の同級生の心の中には同じ葛藤があったに違いありません。

それから9年後の2025年8月2日、高知で同窓会本部総会懇親会が31期幹事により行われました。テーマは、「忘れられないあの日 37年たちました 3・24」。例年通り第1部の総会が終わり、第2部懇親会の「特別授業」では31期同級生2名が淡々と、時に声を詰まら

せながら思いを語りました。

一人目の同級生は、修学旅行出発の様子から事故直前・直後の様子を語りました。彼はもともと多くの友人を無くすことになった車両の席にいたが、たまたま別の車両にトランプをするために友人と移動していた。もう少しで勝負がつくと言うところで、「先に戻るわ」といってその友人だけがもといた自分の車両に戻ってしまった。その後に大きな揺れが起こり、なぜか窓の外にもう一つ窓が見えたが、2つの車両が重なるような重大事故であったことは認識できず、現場で勧められるままに避難してしまった。あの時事故の様子がわかっていたら引き返して友人を助けることができたんじゃないか、その思いがずっと続いている。

もう一人の同級生は、事故については同級生それぞれがいろいろな思い・経験・立場を持っており、みなで話すことができるようになるまで何年もかかったと語りました。辿り着いたのは、遺族の立場でも学校側でもなく、同級生としてできることをやること。それは、学校にお願いをして提供してもらったグラウンドの一部に同級生で桜を植樹したことで、毎年3月24日には全員の名前が

入っていない慰霊碑ではなくその桜に同級生が集うようになったこと、毎年命日の前には学校内のメモリアルルームを同級生で掃除するようになったこと。

二人が淡々と語った約1時間の特別授業は、会場の全員が物音ひとつ立てずに聞き入るものでした。会場にいる31期以外の参加者の皆さんにとっては、当事者である31期からの声を初めて聞くことになったと思います。続いた同窓会会長、学校長、来賓の皆様の挨拶では、事故のことを風化させてはいけないというような言葉をいただきました。その言葉は毎年の慰霊式でも言われていると思いますが、この夏のそれには今まで以上に重みがあったと感じました。今年、このテーマで31期の同窓会本部懇親会を取りまとめくれた同級生に感謝の念が絶えません。

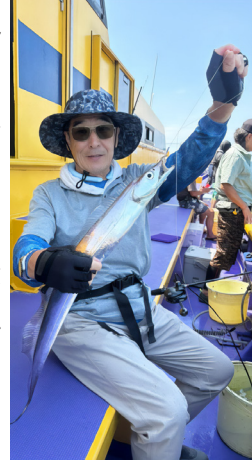
あさかぜでは、「各期の声」に投稿していただける同窓生の皆さんを募集しています。日本全国から関東支部の皆さんに近況をお知らせいただける方は、31期西田まで。
junya.nishida@gmail.com



17期生卒業50周年の

お知らせ

17期 森岡 憲祐



17期の皆さん、お元気ですか？

卒業から50年、それぞれが企業人としての生活を終え、今は第二の人生を楽しまれていることと思います。私も昨年4月から新たな生活を始め、今はウォーキングや船釣りを楽しむ日々です。

関東に来て約30年になりますが、長時間通勤や単身赴任を理由に、同窓会にはこれまで一度しか出席できませんでしたが、そんな私が誘うのも気が引けますが、この節目の年、久しぶりに高校時代を思い出しながら、先輩や後輩とも気軽に話せる場に顔を出してみませんか？

関東支部の総会で、皆さんにお会いできるのを、心から楽しみにしています。

10月10日までに「参加」のお返事を頂いた17期の皆さんには、記念品をご用意いたします。(事務局)

常任幹事・

学年幹事の募集

関東支部として、同窓会会員の皆様の声を広く集めて、より充実した活動をお届けすることを目的として、**常任幹事および学年幹事の募集**を行います。

ご興味のある方は、ぜひ事務局までお問い合わせください。一緒に関東支部を盛り上げていきましょう。

・**常任幹事**：関東支部の事務局として、役員の活動をサポートし、学校や関係各所との連携、機関誌の作成、ホームページ管理、問い合わせ対応、関東支部主催の総会・イベントの運営サポートなどに携わっていただきます。(2〜3名募集)

・**学年幹事**：関東支部が開催する幹事会(年7回程度)に参加し、各学年の同窓会会員への連絡や意見のとりまとめ、関東支部主催の総会・イベントの集客などにご協力いただきます。(各期1名以上募集)

同窓会関東支部

役員・幹事名簿

下記QRコードから御覧ください。



同窓会運営の強化に向けたご協力をお願い

関東支部では、「あさかぜ」のオンライン発行や、案内状の印刷・発送の効率化などに取り組み、支出を抑えながら、安定した運営を続けてきました。しかし、ご承知の通り、近年の会場費や食費などのコスト増を受け、今後も長く、より充実した同窓会活動を継続していくためには、一層の運営強化が必要となって

います。つきましては、会員の皆様には、以下の点についてご協力をお願いします。

・同窓会年会費のお支払い

コロナ禍以降、お支払い頂く会員の方が年々減少していますので、引き続きのご支援をお願いします。

・総会オンライン出欠連絡の活用

昨年10月より、返信用ハガキの料金が値上げされたこともあり、可能な限り、オンライン出欠連絡をご利用ください。

高知学芸高等学校同窓会関東支部 会計報告

(期間：2023.10.1～2024.9.30) 2024.10.12

区 分	項目及び概要	金額(円)
【収入の部】	1.前期繰越金	1,154,533
	2.第36回(2023年)総会参加費	462,000
	3.年会費 ・総会当日分(88,000円) ・振込(117,431円)	205,431
	4.祝金(同窓会本部・学芸高校)・寄付	157,590
	5.銀行利息	66
	収入・計	1,979,620
【支出の部】	1.第36回(2023年)総会関係 ・会場費(685,880円) 記念品(40,462円) ・雑費・交通費(5,245円) ・幹事会会場費等(6,310円)	737,897
	2.案内はがき印刷・発送 ※「あさかぜ36号」は幹事会制作・オンライン発行のため無料	21,947
	3.関東高知県人会(含む振込料)	35,753
	支出・計	795,597
【残高】	次期繰越金	1,184,023

同窓会会員各位

2025年9月吉日
高知学芸高等学校同窓会関東支部
支部長 中城 千秋

高知学芸高等学校同窓会関東支部 第38回総会のご案内

第38回総会を下記の通り開催致しますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

- 日 時：2025年10月25日(土)11時30分～14時50分（例年と異なります）
- 場 所：レストランアラスカ 日本プレスセンター店（例年と異なります）
〒100-0011 東京都千代田区内幸町2丁目2-1 日本プレスセンタービル10階 TEL.03-3503-2731
- レストランアラスカへのアクセス：
 - ・「都営地下鉄三田線」【内幸町駅】下車、「A-7出口」徒歩1分
 - ・「東京メトロ千代田線」「東京メトロ日比谷線」【霞が関駅】下車、「C-4出口」徒歩2分
 - ・「東京メトロ丸の内線」【霞が関駅】下車、「B-2出口」徒歩4分
- 会 費：当日会費 8,000円（55期～：5,000円、学生：2,000円）
年 会 費 2,000円（学生：無料）

式 次 第

開 場（受付開始）	11:00～
総 会（活動報告、会計報告、役員改選等）	11:30～12:00
特別授業 野中 恵子 氏（25期）「トルコで知る地中海国家ローマ」	12:00～12:50
クレオパトラの最期で迎えたヘレニズム時代の終焉から、コンスタンティヌス1世の遷都によるローマ帝国の新時代到来までを、史跡探訪を交えて解説します。	
懇 親 会（立食パーティー）	12:50～14:50

- 出欠の連絡：
オンライン出欠連絡(右記QRコード)、または同封ハガキからご連絡下さい。
同封ハガキ投函、QRコードからの連絡の期限は10月10日(金)までです。
- 会費の支払い：
事前オンライン決済での支払い(右記QRコード)、または当日現金払いです。
受付業務効率化のため、事前オンライン決済にご協力ください。



<年会費(2,000円,学生無料)支払いのお願い>

事前オンライン決済(上述)、銀行振込(下記)、郵便振込(同封振込用紙)をお願いします。

三井住友銀行 上野支店（779） 普通預金「8224917」

「高知学芸高等学校同窓会関東支部 会計 西 雅史」

第38回関東支部総会
特別授業の講師紹介

トルコ研究者・作家

野中 恵子 氏（25期）



トルコほど興味深い国は稀であろう。中東イスラム教の国とはわずか1世紀前のトルコ共和国成立以降のプロフィールにすぎず、歴史上「トルコ」を対極としてきた西欧中心主義に偏重する世界観に埋もれていては、多くのことを見失い見誤る。トルコはオスマン帝国、ローマ帝国（ビザンツ帝国）含むの子孫であり、母胎は地理的要衝性が生んだ文明の宝庫・古代アナトリア国家群だ。五千年の変遷の全てを知るのは、物言わぬ史跡群としての歴史の証人たちである。

【主な活動】

著書に『ビザンツ、オスマン、そしてトルコへ』（彩流社）『史跡・都市を巡るトルコの歴史』（ベレ出版）『ドイツの中のトルコ・移民社会の証言』柘植書房新社など。

慶應義塾大学非常勤講師、朝日カルチャーセンター講師。『FORESIGHT』（新潮社）執筆者。東京国際映画祭通訳、NHKワールドニュース同時通訳。外務省通訳研修講師。元早稲田大学エクステンションセンター講師。

◎関東支部機関誌「あさかぜ」38号は、関東支部ホームページ上で発行します。郵送はございません。

◎関東支部ホームページ（<http://kochigakugeikantoob.web.fc2.com/>）

関東支部主催イベントのご案内、会員同士の交流のお知らせ、「あさかぜ」のバックナンバー等、ご覧いただけます。総会・懇親会の出席連絡も簡単な操作で可能です。右QRコードからもアクセス可能です。

